

一日前プロジェクトによる東日本大震災の個人経験の継承 ～職場での被災経験や業務再開の経験談を中心に～

Ichi-Nichi-Mae (The Day before the Disaster) Project for Inheritance of Personal Lessons Learnt from Great East Japan Earthquake & Tsunami

○西川 智¹
Satoru NISHIKAWA¹

¹名古屋大学 減災連携研究センター

Disaster Mitigation Research Center, Nagoya University

Numerous educational materials have been developed to raise public awareness on disasters in Japan. However, it has been often the case that these materials are not seriously accepted by adults and have not led to preventive action. To address this issue, 'Ichi-Nichi-Mae (the Day before the Disaster) Project' for Disaster Awareness was initiated by the author in 2005. This program interviews people who have been seriously affected by a major disaster, by posing the question 'What would you do if you were back the day before the disaster?' and edits the most impressive personal short stories which give clues for future preventive action. These stories are compiled and have been used for disaster awareness seminars and have proven to be effective, since the real stories make participants feel that it may happen to them. This paper focuses on the experiences of businesses and recovery from the Great East Japan Earthquake.

Keywords : Disaster Awareness, Educational Material, Business Recovery, Personal Interview, Great East Japan Earthquake & Tsunami.

1. 災害はいつも「想定外」から

「生まれてこの方、ここでこんな地震は経験したことがない、まさか震度7とは」「晴れの国○○県と言っていたのに、こんな豪雨が続くなんで」。大きな災害があると、ニュースで私たちは必ずこのような被災者の声をニュースで見聞きする。現場中継のリポーターが「大変です！」と叫ぶ声を聞きながら、全壊した住宅の映像や、泥水に浸かった工場から汗みどろで機材を運び出す作業員の姿に、テレビ画面越しに思わず見入ってしまい、被災者の大変さに同情する。こんな経験のある人が多いだろう。一方で、それらはあくまでもテレビ画面の向こうの出来事であり、自分とは関係ない場所でよかったと内心感じることもあるのではないだろうか。

筆者は、2004年10月の新潟県中越地震の際に政府現地対策本部にへ内閣府防災から派遣されたが、その際に、新潟県庁の職員から「新潟県は地震がない場所なんですけどね…」と言われて驚いたことがある。1964年に発生した新潟地震は、日本で初めて液状化現象に注目が集まった有名な地震で、鉄筋コンクリートの集合住宅が斜めに傾いた様子の記録写真が、筆者の脳裏には深く刻まれていた。しかし、そのとき気が付いた。2004年時点で新潟県庁に勤務している職員には、40年前の地震を職員として経験した人はほとんどいない。そうすると、組織として40年前の地震の記憶が残っていないのではないかと。新潟の地震は、現役県庁職員にとって「想定外」なのだ。

この2004年は「災の年」と言われた。例年を上回る10個の台風が本土に上陸し、10月には新潟県中越地震が発生するなど、災害が多発した年だった。筆者は内閣府防災職員として各地で現地対応等をしたが、「ここにさえ

気を付けていれば、この人は被害に遭わなかったのに」と感じる事が少なからずあった。そしてよく分かった。災害は、個人にとっては常に「想定外」であり、テレビで見聞きする被害は「他人事」なのだ。

2. 「想定外」は実は「認識外」

1995年に阪神・淡路大震災が起こった際、当時の兵庫県庁は災害に備えての宿直体制をもっていなかったため初動が遅れたといわれている。それまで、兵庫県庁も神戸市役所も神戸で地震が発生するとは想定しておらず、災害といえば1938年の阪神大水害を意識しており、大雨などの際も、気象予報を見て庁舎に順次参集するという考え方だったとのことだ¹。しかし、活断層の研究者は、兵庫県内には1596年に大きな地震を引き起こした六甲淡路島断層帯と868年に地震を起こした山崎断層帯が存在していることを以前から公表していた。残念ながら、当時の兵庫県庁と神戸市役所の防災担当者はそのことを認識していなかった。

また、2018年の西日本豪雨で、岡山県の真備町は大変な浸水被害を受けたが、浸水した範囲は、洪水ハザードマップで事前に示されていた区域とほとんど一致していたことが事後に明らかになっている。

阪神・淡路大震災以降、全国の活断層の所在や危険度の調査・公表が進み、水害のハザードマップや土砂災害危険区域の公表も進んでいる。さまざまな災害リスクについての「想定」は数多く公表されているが、それがどれだけ人々に「認識」されているかが課題である。災害後に「想定外」という発言がなされるのは、その発言者がリスクを「認識」していなかったという告白と同じではないだろうか。

3. 「一日前プロジェクト」

阪神・淡路大震災以降、自助・共助の重要性が強調されるようになった。しかし、2004年当時は、その内容が今ひとつ明確になっていなかった。2004年の「災の年」の被害の重大さから、2005年7月から中央防災会議の専門調査会で、自助・共助の具体的な内容について審議されることになった。そして、災害対応力強化のためには、学校教育などだけではなく、一般市民を対象とした教育啓発活動が大切だとし、広く国民向けに防災の教材コンテンツを作成する必要性が提起された²⁾。

阪神・淡路大震災、そして新潟県中越地震の経験から「あのような災害をもう二度と繰り返したくない。そのためには過去の災害から学ぶことが大切だ」という気運が高まり、各地の災害教訓の伝承が進み始めた。経験談から得られる教訓は一般的な災害の解説より感情移入がしやすく、人々の行動の変化を促すものとなり得るのではないかと。同じ時代に生きる人々の経験談を学ぶことは、社会的背景が同じであり身近に感じられることから、有効であると考えられる。

このような議論を経て筆者らは、個々人が防災行動に取り組みきっかけを与えることを意図した大人向けの教材「一日前プロジェクト」の開発を内閣府防災で開始した³⁾。

「一日前プロジェクト」では、近年の地震や津波、風水害、土砂災害、火山噴火などで被災した人や災害対応で苦労された人に、数年後にインタビューし、「もし、あの災害の一日前に戻れたら、あなたは何をしますか?」と問いかけ、300~500字程度のエピソードにまとめ、トピックごとに整理して、内閣府防災のホームページに掲載している。そして、各地でのさまざまな防災意識啓発行事等で自由に活用してもらうように呼びかけている⁴⁾。

自宅、職場、通勤路上、さらには通院時といった、生活の色々なさまざまな場で災害に遭遇した多様な体験談を、これまで800編余収集・公開してきた。そこには老若男女さまざまな立場の人の生の体験が凝縮されていて、読み手に真実味をもって受け止められ、自分も被害にあうかもという「わが事」意識につながり、予防的行動に結び付くと考えている。

4. 「一日前プロジェクト」での東日本大震災の災害経験談

東日本大震災から11年余経過し、実際の体験者が年月を経て今後高齢化していく中で、その災害経験をいかに継承し、次の類似災害の被害軽減につなげるかが大きな課題である。2005年から著者らが開始した「一日前プロジェクト」では、東日本大震災についても様々な立場の個人178件の体験談を収集し、データベース化して防災広報に自由に使えるコンテンツとして一般公開している。こちらのwebsiteを開いていただき、3)東日本大震災のところをクリックしてぜひご覧いただきたい。

<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/sgs/jt.html>

この中には、3月9日の津波注意報では避難したものの3月11日には避難せず、避難しようとしていたお嫁さんともどもなくなってしまったという遺族の悔恨を記録したものが、これは、平成31年3月19日の参議院文教委員会の質疑において、このような教材こそが重

要であると指摘され、このおかげで、予算の制約から一時途切れていた「一日前プロジェクト」エピソードの収集が復活することにつながった。次頁にそのエピソードを掲載したのでご覧いただきたい。

5. 職場での災害経験談と災害からの復興談

労働安全衛生の分野では、事故の防止のため、労働災害事例やヒヤリハット事例が企業や業界団体で長年組織的に収集・活用されているが、自然災害による被災事例はほとんど収集されていない。しかし、勤務中に災害に遭遇したり、また職業人として災害対応や復旧・復興に直面し艱難辛苦を経験する方も多数いらっしゃる。いざ災害に直面した際に、特に企業経営者はうろたえている猶予はない。「一日前プロジェクト」には、1991年の雲仙普賢岳噴火から2018年の北海道胆振東部地震と全道停電までの27の災害で従業員や経営者が直面した事例が収録されている。そこには、思わぬ災害に直面した際に、どのように身を守り、企業を存続させたかの経験談が多数含まれており、平時の企業の備えの参考になり、また企業のBCP演習の参考になるエピソードも多数収録されている。プロジェクトのページ内の「場面で探す」の「企業・職場」から参照いただきたい。

東日本大震災についても、職場で、作業現場で自信・津波に遭遇した際の体験談や、壊滅的被害から企業を復旧・再興させた体験談が多数収録されている。次頁以降にその中から代表的なエピソードの例を3編掲載したのでご一読いただきたい。いずれも、中小企業の経営者や社員が職業人として大災害にどのように立ち向かったかが印象深く理解できる内容である。

6. おわりに

平成31年の参議院文教委員会の質疑を契機に、「一日前プロジェクト」のエピソード収集が復活し、2016年熊本地震、2018年西日本豪雨、2018年北海道胆振東部地震と全道停電、令和元年東日本台風について新たに収集されている。この「一日前プロジェクト」それぞれのエピソードが300~500字のショートストーリーにとりまとめられているので一般市民向けの教材、あるいは、中小企業経営者向けのBCP教材としても使いやすいものとなっており、これを教材として用いた場合の防災意識変化の分析もなされている⁵⁾。広く市民向けに使っていただけるよう、エピソードもイラストも無料でダウンロードして使っていただける設定になっている。ぜひ、東日本大震災の教訓の継承や様々な災害のイメージの喚起のために、皆様が広く活用して下さることを願っております。

参考文献

- 1) 常松貞雄、近代消防 2005 Vol 527, pp24-31
- 2) <https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/undousuishin/index.html>
- 3) 指田朝久、池上三喜子、鍵屋一、鈴木のり子、中川 和之、西川智、新防災教育教材一日前プロジェクトの実施報告、地域安全学会論文集 No. 18, 2012年11月
- 4) <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>
- 5) 北川夏樹、蛭川理紗、西川智「一日前プロジェクト」体験談の読了による 防災意識の変容に関する一考察、地域安全学会梗概集 No. 48, 2021年5月

2日前には逃げたのに・・・

説得していたお嫁さんと子ども亡くなってしまった (2011年3月東日本大震災)
(宮古市 50代 男性 建設会社社長)

震災の2日前の3月9日に三陸沖で地震が発生し、津波注意報が出されました。宮古の沿岸に住む80歳を超える私の叔母は、その注意報を聞いて逃げています。逃げたけれども、そのとき津波は50センチしか来なかったのです。

私が一番ショックなのは、9日に逃げているのに、11日には逃げなかったという事実。「この間とは違うから」と言っても、頑として言うことを聞かず、説得していたお嫁さんと子ども亡くなってしまったのです。

震災のあの日、地元のラジオ局は、地震発生後に気象庁が発表した「14時46分津波の第一波観測、大船渡で20センチ」を放送しています。

その低い観測値を聞いたから逃げなかったという話もありますが、私はそういうことではないと思います。海の近くで大きな揺れを感じたら、何度でも逃げてほしかったなと思っています。



平成31年3月19日参議院文教科学委員会で取り上げられる

図-1 東日本大震災の津波避難のエピソード

従業員は解雇せず～あきらめないで会社再開～

とにかくあきらめずにやっていたら、何とかなる (2011年3月東日本大震災)
(気仙沼市 50代 男性 電装会社社長)

私は、電装会社を経営しています。震災後はがれきで道路が遮断されて、自衛隊以外は立入禁止という状態だったので、会社には4日後に行くことができました。

この仕事は一人前になるのにだいたい10年がかかります。従業員は解雇という形をとり、失業保険をもらってもらおうということも考えましたが、一度解雇してしまったら次の採用は大変です。一人娘を亡くした人、母親を亡くした人と被災した従業員はおりましたが、幸い従業員は全員無事でしたので、当座の資金として10万円を支給して、会社を再開する決心をしました。

当面は、電気が通じなかったもので、10時から12時までの営業です。発電機を知り合いから借りて川から水のくみだしをして、会社の泥かきから始めました。

4月に入り、モーターを直してほしいという依頼があちこちから入るようになりました。モーターを直すには、分解した部品を真水で煮沸しなくてはなりません。ヒーターも必要になります。そんなとき、横浜の同業者から無期限で非常用発電機の貸出しの話が飛び込み、4トラックで運んでいただきました。水産庁からも補助金が出て、運転資金はかなり助かりました。

とにかくあきらめずにやっていたら、何とかなるものだと思います。



図-2 東日本大震災後の中小企業再建のエピソード その1

2週間後に社員集合

～まずはがれき撤去から事業の再建へ～ 東日本大震災(平成23年3月)
(気仙沼市 40代 男性 鉄工所社長)

私の会社は、港町の岸壁の真ん前にありました。震災当日は、出張に出かけるため会社には出ていませんでした。この震災で会社は1、2階が破壊され、辛うじて3階だけが残りました。

社員の安否の確認は、10日ほどかかりましたが幸いにも全員無事でした。少し落ち着いた3月24日に社員に集まってもらい、今後の対策を話し合いました。

まずは、がれきの撤去をしないことには、前に進めません。従業員には、長靴とスコップを持参してもらい、水道も出なかったので水を確保できる人にはプラスチック製タンクを持ってきてもらうことになりました。電気が使えないので、作業は9時から15時までとして、4月から本業を開始という目標をたてて頑張りました。家を流された人もいましたので、無理をせずの作業と決めましたが、中には1時間歩いてきてくれた従業員もいました。

今回の地震で会社は大きなダメージを受けましたが、従業員全員が無事だったことが何よりでした。物は壊れてもまた元に戻りますが、命は二度と戻りません。自分の命を守ることが一番大事です。また、災害時に全従業員が会社にいるわけではありません。一次避難はばらばらでも、二次避難の場所を徹底させることも今回大切だとわかりました。



図-3 東日本大震災の中小企業再建のエピソード その2

宮古駅に止めた列車が災害対策本部

～ライフライン完備で避難所より快適～東日本大震災(平成23年3月)
(宮古市 50代 男性 鉄道会社職員)

津波で宮古市にある本社の1階が冠水し、業務に必要な電気も電話も止まり、暖房も使えませんでした。津波が引いて、さあどうしようかっていうときに、ちょうどホームに午後3時発の列車が出発しないで1両いたのに気付いたんです。ディーゼルなんで、エンジンをかければ電気がつくし、暖房がかかるんで、あっちのほうがいいからあっちで、ということで、列車内に災害対策本部を作りました。

ホワイトボードのでっかいのと、1冊のノートを持って行って、それで状況を随時、運行部とも1時間置きくらいに連絡をとりながらやっていましたね。何があったか全部、ノートに記録していました。

まず状況把握しろということで指示を出したんですが、南リアス線は釜石や大船渡の被害を見て「もうこれはもう鉄道だめかも」という声が幹部からも出てしまうなど、かなり動揺があったので、本社から総務課長を送り込んで「まずとにかく少しでも動かすことから始めよう」と態勢立て直しを図りました。

社員は全員無事でしたが、家が完全に被災している者は帰らせて、内陸側で何ともない社員が中心になってとにかく早く動かすという方向でやりました。自宅待機でいいと指示した乗務員も、遠くから自転車で通勤してきていました。停電だった1週間近くは、列車の中の対策本部にずっといました。電気が通じた時点で、これで助かったという感じで本社に戻ったのですが、下手な避難所にいるよりはずっと快適でしたね。



図-4 東日本大震災の鉄道社員の災害対応のエピソード